



◆詩と批評◆第165号◆

2023-4年◆冬◆季刊

【追悼・井上孝雄】

◆ ◆
足立正生 Adachi Masao

管啓次郎 Suga Keijiro

金野孝子 Kinno Takako

ジェフリー・アングルス Jeffrey Angles

笠間直穂子 Kasama Naoko

樋口良澄 Higuchi Yoshizumi

イナン・オネル Inan Oener

新井高子 Arai Takako
◆ ◆

・作品・

〈映画〉足立正生監督『REVOLUTION+1』製作) LOFT CINEMA、太秦、足立組 (2022年公開)

〈詩集〉管啓次郎『一週間、その他の小さな旅』コトニ社 (¥2640)

金野孝子『詩集 山吹』私家版、岩手開発産業株式会社印刷

ジェフリー・アングルス『わたしの日付変更線』思潮社 (¥2420)

新井高子『ベットと織機』未知谷 (¥2200)

〈翻訳〉ビレテール著、笠間直穂子訳『北京での出会い もうひとりのオーレリア』みすず書房 (¥3960)

イナン・オネル訳『「ナーズム・オラトリオ」テキスト全訳』非売品

〈評論〉樋口良澄『唐十郎論 ―逆襲する言葉と身体』未知谷 (¥2200)

新井高子『唐十郎のせりふ ―二〇〇〇年代戯曲をひらく』幻戯書房 (¥3080)

・お知らせ 1・

新井高子がドイツ・ケルン開催「Poetica 9」(2024年1月22-27日)に招待されました。テーマは〈After Nature ―Imaginations of Nature Poetry〉。詳細は<https://www.poetica.uni-koeln.de/poetica-9/>

・ 2・

2023年10月27日、下北沢アレーホールで、催し「トルコ近現代の詩を読む 詩人を語る」(イナンズ企画主催、ミテ・プレス共催)を開催し、トルコ日刊紙・アイドゥンルク新聞、東京新聞「大波小波」等にイナン・オネルの訳業が取り上げられました。詳細は、オネルのX(@inanoner)を。

・ 3・

2024年3月19日(火) 19:00~、吉増剛造&鈴木余位&樋口良澄らによる第3回イベント於・南青山 MANDALA、¥2800 (学生 ¥1500) + 1drink、詳細は樋口のX (@eEQADIYhRaffl6r)。

・ 4・

『三田文学』2023年秋季号に、新井が巻頭詩「汗玉」を寄稿しました。

・ 5・

新井の講演録「ことばはおどる」(『國學院雑誌』2022年10月号掲載)のpdfが、公開されました(無料)。 <https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/760>

・ 6・

2023年11月22日に京都アメリカ大学コンソーシアム(企画・Cody Poulton)、12月12日に東京外国語大学(企画・Irina Holca)で、新井が東北おんぼの書籍や映画に関する講演を行いました。

・ 7・

ウクライナから来日したオリガ・ニコレンコ(ポルタワ国立教育大学教授)らによる講演会「ゴーゴリの演劇 ―『査察官』を中心に」を、11月30日、野中進の協力で新井が埼玉大で運営しました。

・ 8・

『ミテ』新号は、サイト「お知らせ」欄からpdfでも読めます(半年限定)。 <http://www.mi-te-press.net/>

【後記】管啓次郎さんと金野孝子さんに詩、足立正生さんに追悼文の寄稿をお願いしました。

編集: 新井高子 / 発行所: ミテ・プレス / 発行日: 2023年12月31日(日)

寄付を随時受け付けております。郵便局口座: 10090-74894051 名称) ミテノカイ

E-mail: mite@ace.ocn.ne.jp

「ソレデハミナサマ、ゴキゲンヨウ。」

なまけもの

管啓次郎

なまけものはなまけてるわけじゃない
きみたちのなまけとはなまけがちがう
百万年前すでにこうして生きていて
変える必要をまったく認めなかった
なまけた生き方に見えようと

そのなまけは悪徳でも美質でもなく
ただ研ぎすまれた森の生活
アルカロイドを含んだ葉っぱばかり食べて
消化のために時間がかかるんだから
仕方がない、文句もない
笹食いのパンダやユーカリ食いのコアラにも
少しは似たところがあるんだろうか

夜の森になまけものを見にいった
高い樹の枝が風にゆれている
運がよかった

月光に銀色の体が浮かび上がる
その神々しさといったら

孤高だ

高さ三十メートルほどあっても
必要があれば二分で上りきるらしい
いまは動かない
じっとしている

満月にとらわれたうさぎに対抗するように

なまけものはなまけてるわけじゃない

いまのいま、この瞬間にも

全速力で進化している

その速度はわれわれには見えない

進化のしるしは前足の指の数

二つ指と三つ指に

なぜ分かれたんだろう

じゃんけんをするためではないね

戦うつもりもない

ただ枝からぶら下がり

枝の摂理に黙々としたがう

枝の摂理は水と重力にしたがう

それはゆるぎのない森の道

やわらかい若い葉っぱを求めて

木の上のほうまで行き

ぶら下がり、もぐもぐと葉っぱを食べ

一週間にいちど木から降りて排泄する

もちろん怖いものはあるよ

プーマが怖いんだ、ぶるぶる

カウセル（山猫）が怖いんだ、ぶるぶる

肉食獣のもつとも兇暴なやつら

かれらはすさまじい身体能力をもつて

木の上にいるわれわれだって狩りにくる

目立たないようになまけものはじっとしている

そんな生き方

なまけものはなまけてるわけじゃない

ひとりで生きるのが基本

雌も雄も単独で

ひっそり、のんびり、しっかり

生きている

一緒にいるのは母親と子供だけ

あとは一生ひとりで生きる

森とひとつになって

森をまるごと体験し

糞をせつせと地面に運び

樹冠と根を循環させる

野心はない

というかすべてが野生の心

なまけものはなまけてるわけじゃない

独立独歩のぶら下がり

それは瞬間ごとにしずかな

完全燃焼の生き方だ

米研ぎするすど

金野孝子

米研ぎ こめと 始めつと はじ

たまあに むがし 昔ア来るもんなア

食うものア不足した ふそぐ 戦中戦後 せんちゅうせんご

おらア がっこせーと 学校生徒だった

親だちア おや なんぼ ウザネ吐いだがな は

切符で きつぷ 米ア配給されで こめ はいきゅう

空襲警報ア くうすうけいほう 発令されつと はつれい

その米ば こめ 背負つて そ

茹でだナレイモだの ゆ

豆炒りア入った袋ば まめい たんげアで ふたろ

山さ隠れだり やま かぐ 防空壕さ入ったりさア ぼうくうごう

校庭さば こうてい 南瓜アまぎ かぼちゃ

山ア開墾して やま かいこん 蕎麦アまぎ そば

ぬぐい盛りだったなア さが

お昼になるすど ひる

大根だの若芽のカデ飯ア であい わがめ メシ

あめ加減に かげん なってるもんだったア

水筒でば すいとう すぐ空んなり から

沢さ下りでつて さわ くだり 怒られで おこ

ゆぐ はら 腹も病まねアし や

日射病にも にっしびょう なんねアがったもんだなア

日本が にっぽん 勝づんだがら—— か

兵隊さんの へいたい お陰なんだがら—— かげ

心さ こころ しつかど修めで おさ

いづが いづ 日の丸べんとうば ひ まる

食うどぎア来るすど く 信じてよお すん

としよ
年寄りがら、童アどがら、

そればり

すん
信じてよお——

あゝ 米研ぎア終わった

あどア 一本の指つこで押せばせア

炊飯器の中さ 白い米の飯ア

炊ぎあがるう

なんぼでも食うの ええ

いま
今ア なんでも やんべア時で ええもんなア

*・米研ぎするずど…米研ぎをするというと。・たまあに…たまに。・ウザネ吐く…心身ともにが
んばる。・ナレイモ…じゃがいも。・豆炒り…炒り豆。・たんげアで…持つて。・ぬぐい…暑
い。・カデ飯…野菜などで米の不足を補ったご飯。・あめ加減に…饅頭で腐りはじめて。・水筒
でば…水筒こそ。・ゆぐ…よく。・童アど…子供たち。・そればり…そればかり。・信じてよ
お…依頼ではなく、感嘆の表現。・なんぼでも食うのええ…いくらでも食えることはいい。・なん
でもやんべア時でええもんなア…なんでもいい時でいいもんだなあ。

* (新井高子より)

気仙弁の師匠、金野孝子さんは九一歳。米を研ぎつつ、戦中戦後の子ども時代、娘時代をふと回想し
たことを詩に書いてくださった。ここで特筆したいのは、「昔ア来る」という言い回しだ。電話で詳し
くその感覚をうかがったところ、昔というのは、それを語ったときに自分の中におのずと入って来る
もので、他のお年寄り達もこの言い方をしたのだという。バイリンガルでもある彼女は「ハイカラ弁
(標準語)では「昔に戻る」というけれど、気仙弁では「昔が来る」だった」と言い、さらに気仙弁では
「昔というのはいつもそこにある、んじやない。何かの拍子にやって来る」と説く。例えば、仲良しでお
茶っこ(茶話会)をして、若い頃の思い出話に花が咲いた後には、「あれア、しばらくぶりで、今日ア、
昔ア来たねア(あらあら、久しぶりに、今日は昔が来たねえ)」と言ったものなのだそうです。「昔ア来た
ったねア」とも言ったそう。語尾の「ねア」が長く伸びることも大事で、そう伸ばすと懐かしく思う
気持ちも響き、聞く方もそれなりの態度で聞いたものだったとも教えてくださった。

気仙弁は文字表記なしでえんえんと続いてきた。日記や写真などによる過去の物体化を被らず、年
表のような時系列意識の希薄な「声だけの世界」がそこにはあった。そのような時空では、「昔」は、
今現在に到、来、する事象として意識されていた。たいへん深い認識だと思った。

『日本語と時間』(岩波新書)等によって藤井貞和が論じた時制論は、小誌でも何度か取り上げたが、古
語の過去「き」「けり」がそもそも「来る」に由来するというその説を、気仙のご先輩はまさに実感し
ながら生きているのではないだろうか。「今は昔」という物語の導入句にも繋がる気がする。

ある男がわたしに言った

今、雪が降っている

いや、むしろ、ある男が言って、私は聞いた

忍びよる静かなもの

いや、むしろ、ある男が読んで、私は盗み聞きした

昼間も奇妙な半夜らしいもの

いや、むしろ、ある男が唱えて、私は盗み聞きした

そして、山は去った

いや、むしろ、ある男が唱えて、私は録音を盗み聞きした

そして、わたしは思った

忍びよる静かなものは、雪だったのか、

それとも、今だったのか

にわかな降雪だったのか、

それとも、長く続く近代だったのか

その人はわたしと同じ国の人だった

むしろ、その人はわたしの国の中にある国の人だった

そして、山は去った

むしろ、その人はわたしの国の中に昔からある国の人だった

奇妙な半夜らしい昼間も過ぎ去った

そして、わたしは思った

過ぎ去ったものは、昼間だったのか、

それとも、山だったのか

そして、わたしは思った

忍びよる静かなものは、国を抱える国だったのか、

それとも、国々を抱える近代だったのか

そして、わたしは思った

過ぎ去った半夜らしいものは、山だったのか、

それとも、国の中の国だったのか

一日が奇妙な半夜であるとき

わたしは淡い日々を思いだす

忍びよる静かなものを

奇妙な半夜らしい昼間を

それは、読み聞かせをして

くれた男が教えてくれた

むしろ、読み聞かせをして

くれなかった男が教えてくれた

むしろ、録音されて聞かせて

くれた男が教えてくれた
むしろ、録音されて聞かせて

くれたなかった男が教えてくれた
そして、わたしは聞いた

その男の雪を

その男の今を

その男の忍びよる静かなものを

その男の静かに忍びよった国を

その男の静かに忍びよられた国を

その男の古びない驚嘆の声の朗読を

そして、わたしは思った

忍びよる静かなものは、古びない驚嘆の声だったのか、

それとも、その男だったのか

わたしと同じ国だったのか、

それとも、わたしの国の中の国だったのか

忍びよる静かなものは国だったのか、

それとも、近代だったのか

奇妙な半夜らしいものは、境界だったのか、

それとも、時間そのものだったのか

半夜のように淡い

そして、わたしは思った

半夜のように淡いのは、雪なのか、

それとも、今なのか

半夜のように淡いのは、国なのか、

それとも、国の中の国なのか

半夜のように淡いのは、忍びよる静かなものなのか、

それとも、古びない驚嘆の声なのか

コヨーテが血だらけの痛哭を夜空に上げたとき

それは忍びよる静かなものだったのか、

それとも、奇妙な半夜らしいものだったのか

古びない驚嘆の声で

ある男がわたしに言った

ある男がわたしに言わなかった

ある男が読んで

わたしは盗み聞きした

忍びよる静かな男を、

奇妙な半夜らしい男を、

わたしが会ったことがない男を、

わたしが生まれる前に亡くなった男を、

注：ダーシー・ミックニッケル D'Arcy McNickle (1904-1977)、アメリカ先住民、セイリシュ・クートニー

Salish-Kootenai 族連合の詩人と活動家の詩「ザ・マウンテンズ」を引用した箇所がある。

——その人がわかること

幽かに、まだわかること、

白いきものと白い花で野辺送りをしたんだよ。その時分ア、生きてる者も、その色を着て、ぎゅッと晒しの帯締めで。ゆく見えるからですよ、白ならば、

閉じたまんな目の蓋の底でも。

それが

来るんだね、

灰青や褐色や朽葉色も。白のつもりで、アツという間に何十年も吹いたつきやあ。

いまにも地下へ潜っていきそうなくず汚れた婆アたちが、三、四人。いや、五、六人。

数えでアならんのよ。

見えないから、その色は、

瞑ったまんなの水鏡の人にア。

親類縁者の外ツかわで、むそむそと、むそむそと、

唱えでおるのか、詠うでおるのか。聞けてくるのア、切れ切れで。背中が右さ曲

がった婆アも、左が潰イで臭おうのも、目脂で穴が塞がったのも。

うツすら寒ぐで、川原の蒲さえ沈んでしまつて。

それが

急に、

まッ直ぐと、まッ直ぐと、その杖立てで、

鳴らしやつた、

鈴、鈴、鈴、鈴、鈴、

どこにもおらん色どもが

雲雀よりも甲高く、

探^{さが}そうとすることがですよ、

その者^{もの}たちを

キキツと、耳^{みみ}殻^{がら}が、目^め頭^{がしら}が、動^いくがですよ、

棺^{ひつぎ}という小舟^{こふね}のながで

頬^ほを、ふうつと紅潮^{ほの}らして。

鈴^{すず}音^ねだけア、ゆぐ通^とるんだねえア、その耳^{みみ}道^{みち}に、

川道^{かわみち}に。

「山^{やま}さ捨^すでらいた婆^ばアさまたちでねアか」って、だれかが。

その人^{ひと}が幽^{かす}かにわからっしやることを施^ほすのが、

辺^{へど}りのお見^み送^{おく}りであつたのか――。

わかること

まだわかること、

いえ、

いま、

指^{ユビ}が

ひとりでに、

――ソノ計^{フホク}報^シヲ知^スツタノハ、数^{スウ}日^{ジツ}後^ゴテ、シバシ呆^{ボクゼン}然^{ゼン}トシテ、トモカク携^{デン}帯^ン電^ワ話^ワヲ

取^トり出^ダスト、二^ニ度^ドノ発^リ信^レ履^キ歴^キガ、アルノデス。ソコへ。ソウダッタ。アノ朝^{アサ}、

不^フ図^ト、触^フレテシマツテ、スグ切^キツテ、慌^{アワ}テタセイデ、マタ、鳴^ナラシタ。

目^{マン}蓋^ダの人^{ヒト}が頼^{タノ}んでくれたか

その鈴^{スズ}を、

この手^テが

悟^{サト}ったか

詩人オヌル・ジャイマズ的一篇の詩

訳 イナン・オネル

詩人オヌル・ジャイマズは一九七七年イスタンブール生まれ。「第二の新」の詩人ジェマル・スレヤ（一九三一〜一九九〇）に言及している詩を今号のために訳す。私は二五年前にトルコ語から日本語に詩を訳したいと漠然と思いはじめたとき、イメージしていたのはジェマル・スレヤの詩であった。言ってみれば私の訳詩業はジェマル・スレヤへの言及として記憶されたい。

旅に出るとき

新たな旅に出る 憧れ
ジェマル・スレヤをふたたび読み始めた
何かを終えて 新たに始めるのは 快い
樹木の青く茂るときの音を聴くがよい
寒いのであれば あなたが上にかぶせればよい 大空の
だいぶ長く時間がたった きつと二行詩もまた寒い

赤いシャツは似合うだろうか 子供よ

十四歳から喜んで眺めてみたい あなたが着るのであれば

——だいぶ長く時間がたった 一杯の水の喜び

ランチ弁当食券の希望

ミニバスの夜のライトから明かりを取り出せず——

川に意図的に光を落とす若盛りの月

身分証をなくした学生の

バスで受ける不当な扱いを

いかに説明できるだろう 現代の恋愛の意味が分かっていれば

わたしはもうこれから新たな人生を生きるのだ 真っ裸の悲しみ

隠された何らかの感情を話すのが

勇気を求める 恐怖に慣れて そして

孤独はそれだけで何の役にも立たない

折れた爪のピンクのマニキュアから

船が出る 知らないどこかへ

何もかも魂がある あなたに見えるなら

夜の公園も 列車の窓も 船も

あなたはそれらを知っている 子供のときにそれらが通った
興奮気味の抑圧された子供から 閉ざされたカーテンから
引越した家が残った いつも何故か

新たに旅に出る 憧れ

ジェマル・スレヤをふたたび読み始めた
すべてを終えて 新たに始めるのは 快い

つまりわたしは新たに生きることを始める 別れ

父の墓石の文字が読めなくなっている

好きな歌を重ねて聴く 何千回も

前は多くても少なくとも気にならなかった

オリーブオイルベースの料理を食べるように注意している

酒を断ったが カーディガンはやめられなかった どうにも

——だいたい長く時間がたった それが分かる

兵役に行った 例えば 結婚した 離婚した 書物など

あなたはだいたい悲しまされたようだ 絵を見て分かった

世界にも苦しみがある わたしたちも

生きる——

そしてあなたも覚えなさい 冬にかけて土の水が切れたら
他を生かすために葉っぱは自ら落ちる

二〇〇四年 冬

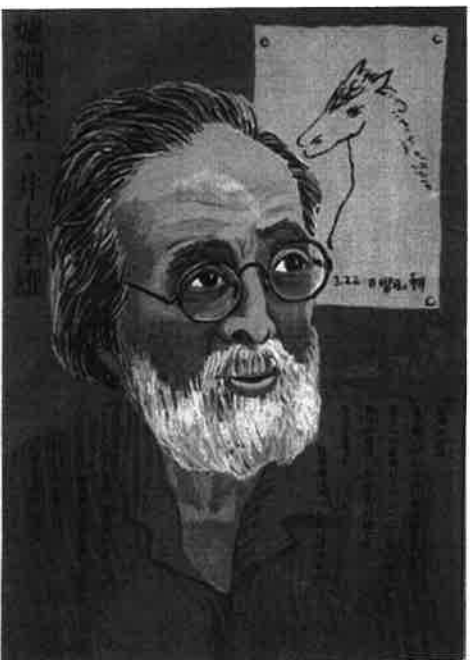
コズヤタウ

* 一〇月二七日、イナNZ企画主催、『ミテ』共催の催し「トルコ近現代詩を読む 詩人を語る」(於・
下北沢アレーホール)を行なった際、イナNさんの翻訳一覧を作成したところ、通し番号に重複があ
ることがわかりました。今号は「95」でなく「97」です。訂正します。(新井)

【特集】追悼 井上孝雄①
究極のディレクター

——井上孝雄追悼

足立正生



井上孝雄像（絵・足立正生）

井上孝雄が逝った。彼のことを考えると、一九六〇年代末、まだ生意気な少年・井上孝雄のことが昨日のことのように思い出されて仕方がない。

彼と出会って急激に親しくなったのは、何にも物怖じしない度胸を感じさせ、「ゴダール、いいですね」と言い、皮肉屋の私が「あんな知性をひけらかすような作り方は腹が立つし、眠くなる」とやり返すと、「そこが面白いんです。ギリギリのところ映画に踏みとどまっていて、全てを批評している」とあくまで自説を曲げない。論争になると、その正鵠を突いた批評は鋭さに満ちていた。実はゴダール好きの私は「なるほどね!」と、彼に同調することで終わった。

今は死語かもしれないが、その頃、仲間うちでは評論家などを「ディレクター」と侮蔑的に呼んでいた。語義の通りに愛好家とか評論屋とかの意味合いは含んだままだったが、実践的にアート創造に取り組まない者への蔑称にしていた。そして、生意気な少年だったのは井上孝雄だけではなく、私たちこそ、映画会社への就職を拒否して「自分たちの映画を創る!」と意気込む生意気盛りの貧乏映画青年だったので、創ろうとしない奴は「ディレクター」だったのだ。

そう。井上少年に何度も「じゃあ、一緒に映画を創ろう」と誘ったが、彼は「いや、私はそちら側には飛べません」と固辞し続けた。そして、罵罵倒すると「単なるディレクターで何が悪い」と静かに反論し、創る者

観る者論を語り続けていた。

長い間「海外出張」していた私は三五年ぶりに映画作りを再開した。井上孝雄はもう少年ではなかったが、珍しく、自分自身の三〇年間近くの生活を語ってくれた。

井上少年は、「無目的な旅」をするために日本列島を南下する無銭旅行に出たらしい。行き当たりばったりの「何でも観てやろう」。日本中を歩き廻り、アルバイトで食いつなぐ仕方を繰り返したらしい、だがある日、須磨辺りの海岸で夕陽を眺めている時に「ひよっとすると、これは永遠の旅なのか?」と疑い、だが、「この旅は、何かを発見する為でもなく、何かから逃げるのでもない。すると、自分を見つめることから逃げているだけなのか!」と悟り、「わざわざ逃亡劇でしかない放浪の旅を続けるのは、自分らしくない」と愕然として実家に戻り、「おふくろの味」を自称するあの有楽町の『爐端本店』という飲み屋を継いだらしい。

語られてみると、井上孝雄の本性は、実は好奇心と出会いの妙味を捨てきれないままの少年の生き様が続いていたのだ。例えば、彼の実兄が『ブルー・シャトウ』でブレイクしたりレコード大賞をとっても、音楽や実兄の話は一切興味を示さないし、「いやあ、映画を観る目は、僕よりも兄貴の方が鋭かった」と評して、自分の視線をピクリとも揺るがせなかった。

私はこの二〇年間に三本ほど映画を創った。井上孝雄がその撮影現場に来てくれ、出演して貰ったりした。そして、完成試写を観て、相変わらず辛口の批評をしてくれた。『幽閉者』は「精神の自由さを描くのに、遠慮が残っている」とか、『断食芸人』は「思想の豊かさを描き切れていない」とか、『Revolution+1』は、「十分楽しみましたね。でも皮肉が無かったのは珍しい」と、とびつきのディレクター振りを見せてくれた。

その井上孝雄が、数年前脳梗塞で倒れた。病室に見舞うと「もう治ったも同然です」と言って点滴を外し、「昼飯に行きましょう」と誘って近くのレストランに行き旺盛な食欲を発揮して安心させてくれた。ところが、退院して『爐端本店』に戻った彼に会うと、「最近、どうも声が出にくいんです」と言う。私は「じゃあ、また後で話し合おう」と別れた。

その数日後、突然、井上孝雄が死んだと訃報が飛び込んで来た。あまりにも呆気なかった。あの、好奇心、その眼差しの塊のような井上孝雄が消えた。すると、私はもう皮肉を言う相手が無く、独り言を言い続けるしかなかった。寂しくて仕方がない。

【特集】追悼 井上孝雄②
愛の流儀

——井上さん追悼

樋口良澄

先日「爐端」に弔問に行った。二階の片隅に遺影が飾られ、花に囲まれていた。髭をたくわえた近年の写真。立派な遺影だった。いつも影のように隅にいて店を見守っていた井上さんが、個人として力強く立ち現れている。その日は若い人々で一階も二階も満席だった。井上さんも盛況を喜んでいるだろう。

私にとって、八十、九十年代の詩の集まりの記憶とともに、「爐端」はある。北海道を詩を朗読して回った「北の朗唱」の会。ジョナス・メカスとの交流を続けたメカス会。大野一雄の舞踏を石狩で企画した会。様々な詩の朗読会……。そうした会の打ち合わせやら打ち上げが「爐端」で行われ、飲むだけでなく、朗読や舞踏も飛び出した。大野一雄は何度宴席で踊っただろう。店は一階から三階まであり、テーブル席、和室、半個室など複雑な構造を持つ日本家屋。そこに雑然と絵画や書が置かれた空間は、パフォーマンスを呼び起こす舞台だった。井上さんはいつも和装で、手先を覆うように腕組みをし、片隅で見守っていた。もちろん、店主として全てが行き届くように見守っていたのだが、表現者たちに寄り添っていたのだろう。

それは店の外でも変わらなかった。北の朗唱で冬の北海道と一緒に旅したことがある。札幌、釧路、旭川……。寒かった。その寒さの中、戸外でも井上さんは腕組みをして皆を見つめていた。

詩だけでなく、映画、美術、音楽、演劇……。あらゆるジャンルの人が「爐端」には集まった。店内に飾られたその関連の作品や原稿は、次第に増えていった。スマホもネットも無かった時代。人々は密を避けなかった。「爐端」の宴席では、店に入りきれ

ずに、しばしば、立ったまま入り口の周りで酒を酌み交わすことがあった。新しい出会い、刺激的な話があふれた。

その熱気は今はどこに行ったのだろう。井上さんはそんな世の変化を越えて客を愛し続けていたに違いない。その愛が、時に過剰と思える激しさになることもあった。私が企画した会を「爐端」で行う際、井上さんと打ち合わせをすると、人の位置どり、料理へのこだわりなどの段取りに井上さんなりの愛の流儀があることがわかった。

おそらくそれは私が通い始める前から育んだものだったろう。井上さんは慶応大学で吉増剛造さんの少し後輩で、吉田武紀ら吉増剛造さん周辺の詩青年たちと大学時代から交流があったようだ。吉増剛造さんはメカス会や北の朗唱で人々の交流の核だったから、八十年代から九十年代にかけて、吉増さんが加わる会が「爐端」ではおそらく一番多かったのではないか。その宴の豊かさが、現在まで続く詩の広がりや育んだのは確かだし、それを体験できたことはよかったと思う。そうした機会はあまりに少なくなってしまった。

井上さんの芸術愛の底には、そうした学生時代に発する疾風怒濤があったに違いない。だから、熱く持続したのではないか。それは私には届かない世界だった。もっと話をうかがっておけばよかった。



【特集】追悼 井上孝雄③

荒削りのお猪口

——井上孝雄さんを追悼して

ジェフリー・アングルス

私にとって、日本はものすごく大切なところです。日本の文学について、文化史について、言語について、常に考えています。ほぼ毎日、日本語を学生に教えたり、日本語で書かれた小説や論文などを読んでいます。しかし、日本にはマイホームと呼べる場所がありません。もっと若いときには、日本に長く滞在したことが何度もあるが、この二十年ぐらいいはアメリカに定住し、中西部にある州立大学で日本の文学と文化史と言葉を教えています。年に一、二度、日本に戻る機会があります。夏学期には教える必要がないので、授業から解放されている間、東京に戻って、短期滞在することが少なくないのです。

日本に家がないからこそ、戻るたびにどうしても行きたいところがあります。自分の家のように居心地が良く、いつも歓迎してくれるところです。それは井上孝雄さんが心を込めて経営していらしたレストラン「燵端」。東京に二、三日しか滞在できなくても、巣に戻る鳩のように、燵端に必ず向かって行きます。そこで、愛情のこもった料理を素朴な食器からいただきながら、一九六〇、七〇年代の前衛芸術に囲まれて、詩歌や小説、芸術や音楽を愛する友人たちと深夜まで会話を交わしたことが何度もあります。やはり、影が多い燵端の和室に座って、時間を過ごすことができなければ、自分の東京滞在が不完全なような気がします。

燵端が我が家のように感じられるのは、美味しい料理と素敵な食器と芸術作品があるからだけではありません。井上さんの温かく歓迎してくださる人格が非常に大きいです。初めて燵端に行ったのが何年だったかはつきり覚えていないが、井上さんが着物を着て、ハンサムな笑顔で迎えてくれたことは覚えています。店の雰囲気すぐに誘惑されたが、隅々まで井上さんらしさがあふれています。壁に飾られた美術と隅に積まれた詩集と食卓の上にある手作りの陶器などに、彼の優れた趣味がはっきり見えます。

一階から階段を上がると、踊り場の近くに高橋睦郎の「聲の庭」という朗読会の古い案内が、額に入れてかけてありました。実は、その十年以上前に、私が修士課程で日本現代詩を研究し始めたばかりの頃、高橋の本に夢中になって、修士論文の中でも取り上げました。いつか自分もそのようなウィットと知



恵のある詩を書けるようになりたいと思います。興味深く読みました。階段にかかっているその朗読会案内について井上さんに尋ねると、高橋さんと親交があつて、朗読会などの後、燵端で祝賀会や飲み会をよく開くと仰いました。世間はなんと狭いのだろうと思いました。初めて行ったレストランにもかかわらず、強いつながりがあるというように感じました。

その後、自分の本を祝う会も燵端で行うようになりました。二〇一六年に、私が訳した伊藤比呂美と平田俊子と新井高子の英訳詩集がオーストラリアの詩専門の出版社、バガボンド・プレスから出たとき、たくさんの詩友たちと一緒に燵端で祝いました。また、同じ年に、吉増剛造とアメリカの詩人、フォレスト・ガンダーなどと一緒に朗読会に参加した後、大勢と一緒に祝いに行ったら、井上さんが、低く、ゆっくり喋る独特な声で参加者に一人一人挨拶をなさつて、それぞれの詩人の作品をしつかり読んでいることを明らかにしました。その時、井上さんの文学的な知識と心の広さを垣間見ました。もちろん、いつも通り、お料理も立派なものでした。

その翌年、私の日本語の詩集『わたしの日付変更線』が読売文学賞を受賞したときも、また燵端で祝いたいと思って、友だちの新井高子さんと編集者の高木真史さんに予約を入れていただきました。一年間に一、二度しか来店できない私を、井上さんはあまり覚えていらつしやらないだろうと思ひ込んでいたが、店に行つてみたら、受賞を祝う温かい言葉を早速かけてくださつて、「自分のように嬉しい」と仰いました。一瞬、その詩集を自分のために書いたのではなくて、この着物を着て、文学の教養がある素敵な人と一緒に祝うために書いたのではないか、という錯覚に陥りました。その夜、荒削りした、趣味がいい陶器のお猪口を一個、記念品として井上さんはくださいました。今でも、アメリカのうちでお酒を飲むときに大事に使っています。

何十年もの間に、井上さんは有名な作家と詩人と芸術家の腹を、何人、満たしたでしょうか。燵端は素敵な昭和チックなレストラン、いや、むしろ、ユニークな文学スポットなので、井上さんがいらつしやなくても、私が東京に戻るときには、きっと最前し続けるに違いありません。彼の魂はどの壁にも、どの角にも表れているでしょう。そのとき、その笑顔の魂に、荒削りのお猪口を挙げて、心を込めて、また乾杯させていただきます。

井上孝雄さんと筆者(2017.8.5)



【特集】追悼 井上孝雄④

おまけの金平糖

——「爐端」店主のこと

笠間直穂子

まだ学生のころだったと思いますが、「爐端」が詩人や芸術家たちの集まる居酒屋であることをまったく知らずに、入口の佇まいが気になって、わたしは友人と入りました。入ってみようよ、と、思いきって。

メニューがなく、値段もわからず、並んだ大皿を指さす方式で、高くついたらどうしようと、二人して、やや緊張しながら、でも料理はどれもおいしく、年季の入った内装が目にも優しく、嬉しかった。特に印象に残ったのは洋梨とカッテージチーズのサラダで、いまでも果物のサラダはよくつくる。

飾られた額を見回していたら、手紙らしきものがあり、署名をよく見るとオクタビオ・パスで、これオクタビオ・パスだよ！ と友人と言い合った。帰りぎわ、ご主人にたしかめたところ、とても嬉しそうに、そうです、とだけ答えた。

井上さん、という名前は、ずっと知らずに、いろんなひとと一緒にいった。

岡本喜八の新文芸坐での特集上映の話をしていたら、ふと「きのうは〇〇（作品名）をやっていましたね」と話しかけられて、驚いたり。

別のときは、後輩にあたる研究者と編集者と三人で、居座って、ジュール・ヴェルヌのことなど話していると、食後に頼んでいないいちごが来て、さらにそのあと、なんだかにこにこしながら、空いた皿に金平糖を入れてくれた。七年前に、ぱくきよんみさんの講演会を企画して、ぱくさんの紹介でチラシを置かせてもらったときに、初めて名前を知ったのではなかったか、と思います。

そんなわけで、わたしにとって、彼は、芸術家の誰その紹介でもなんでもない、ただの無名の客でも、文学やら映画やらに興味のあるらしい若者と見れば、そっと応援してくれるひと、でした。



爐端の店先

【特集】追悼 井上孝雄⑤

黒光りする有楽町楼主

——井上孝雄さんのこと

新井高子



会合いの頃

有楽町の割烹『爐端』のご店主、井上孝雄さんが二〇二三年十一月十七日に旅立たれた。享年八十歳。『ミて』創刊号からの貴重な読者だった。詩の世界にはわたしよりも長いお付き合いの方がたくさんおられるだろうが、かれこれ三十年以上になる。慶應時代、詩の講義をとっていた吉増剛造さんに導かれて、その教室の学生といっしょに訪ねたのがはじまりだったから、会合いは一九九〇年頃のことだ。電球に黒光りする柱や梁、肉厚の大皿に盛られた濃やかな料理の数々、壁にかかる前衛絵画や民芸品のきららかさ。土色の猪口に注がれたお酒の旨味を、異空間に舞い上がった若者の舌は、どれだけ味合うことができていただろうか。「僕も慶應なんですよ」、井上さんは低音でつぶやいた。藍染の着物と袴姿で、どことなく縁の下から現れたような顔色が、ふしぎに目に焼き付いた。

吉増さんのブラジル出発を祝う歓送会やジョナス・メカスさんの来日を記念する会も爐端でだった。三階建ての全館に、詩や映画の錚々たる関係者が集った賑々しい宴。若い時分にそのような輝かしい場が覗けたことを心から幸運に思う。井上さんが吟味して集めた片山健やタイガー立石などの絵画を背景に、瀟洒な帽子を被って舞った大野一雄さんの姿も懐かしい。まだ町蔵という名だった町田康さんの歌を聞いたこともある。そこは、いわゆる割烹に留まらず、芸術、芸能、美味なる品々、大事な出会いがさんざめく、本来の意味での市場の凝縮だった。

そうして、わたしが親しくおしゃべりを交わすようになるのは、慶應東洋史学科での恩師、世界史学者・中東学者の

三木亘さんともしばしば通ったのが大きい^一。三木フアンの方井上さんは、厨房を出て、わたしたちの宴席でしばし嬉しうに耳を傾けたり、「三木先生はどう思われますか」と、思想家でもあるその人に、日頃の疑問を投げかけたりもしていた。古来の市場とは、知性の交換の場でもあったろう。

いや、距離が縮まったのは、じつはわたしたちの飲みつぶりのほうを井上さんは面白がったからかもしれない。当時、三木さんは六〇代だったが、二〇代のわたしたちによくぞとことん付き合ってくれたと思う。一次会はともあれ三田界限だったから、爐端にたどり着くときはすでにき上がっていることもしばしばだった。何事につけ、のん気なわたしは、飲み方を知るのにさえ時間がかったというほうが正しいが、当時はなかなかの酒豪だったのだ。

あの日は、三田を経た後、有楽町ガード下の焼鳥屋でも盛り上がり上がってから、爐端へなだれ込んだ。ともあれ、からだの芯から知恵者の三木さんは、酔っ払っても中東のおおどかさやパレスチナ問題や現代日本に対する独自の考現学を説き、わたしはわたしで書きはじめの青二才らしく、なにがなんだかわからない詩との格闘をじぶんなりに言い表そうと踏ん張っていた。そして、どうやら泣きながら「じぶんのからの輝きに、わたしの詩は追いつかない」と嘆じたようだが(若気の至りとして、ご失笑ください)、あとから聞いたところによると、そうして廁へ行ったらまま出て来ず、要するにひき籠もったあげくに寝落ちしてしまった。

これは、「おたか籠城事件」(三木さんはしばしば「おたか」とわたしを呼んだ)として、その後もしばらく二人にからかわれる珍事となったが、そのときそう悲嘆したわたしを、井上さんは酔っ払いの戯言として片付けず、まっすぐ見定め、「あなたの認識は間違っています」とずっしり受け止めてくださったことのほうはよく覚えている。

当時は友人たちと同人誌『四面楚歌』を編み、それをお届けしてもいたが、高橋睦郎さん、オクタビオ・パスさんの色紙も掛かる爐端。その三階にはたくさん本の本が詰まれ、もちろん井上さんは素晴らしき読書家でもあった。あるとき、「あなたにはこの詩集が似合います」と、一冊が差し出された。ガルシア・ロルカ、長谷川四郎訳『ジプシー歌集』。その後も含めて、「似合う」詩集というのを手にしたのは、これっきりだ。

かじりつくように詩行を追ったものの、当時の力量でどれだけ読みこなせたか心許ない。わたしの詩と人間性への批評として選んでくださったに違いはないが、じつを言えば、長らくこのことを思い出さなかった^二。そうしていまでは、のちのちの道行きがこのように見通されていたことに、愕

^一 三木亘(一九二五―二〇一六年)。深刻なガザの事情を考えるために、その著書『悪としての世界史』(文春学藝ライブラリ

1、二〇一六年)をお薦めしたい。本書の刊行に井上さんも心を

砕いてくださった。

^二 菅啓次郎さんは、論考「詩、集合性、翻訳についてのノート」(『翻訳と文学』(みすず書房、二〇二一年刊))で、拙編著1

然とする。日本列島の文脈では、ジブシーは芸能民、河原者と重なる面があるだろう。そのとき唐十郎にわたしはまだ出会っていない。河原乞食を標榜する彼の芝居に惹き込まれるのは、十年近く後の二〇〇〇年代からのこと。さらに震災後は、大船渡でのおんばたちとの出会いを糧に、東北の土地ことば、故郷の桐生のそれ、民話や芸能などの語りを脱構築し、じぶんなりに編んだ地べたをさすらう民のことばで、詩の夢を綴ろうとしている。いつのまにか、何十年もかけながら『ジブシー歌集』に近付いている。

第一詩集をまとめようと思ったとき、わたしは素直に井上さんに相談した。出版社とも知り合いに違いないと思ったのだが、それは意識の表層で、たぶん若者なりの勘であり、じぶんの何かを捉えてくださっていることを感じとり、頼りにしたのだろう。「ちょっと考えてみます」とその人は言ったが、酒の席でのことだ。忘れてしまおうほうがふつうのようにも思ったが、一週間くらいすると電話が鳴った。「あなたには、釧路の緑鯨社が向いていると思います」。

北海道……。まだ旅したこともなかった。修士課程を終えて非常勤講師やら家庭教師やらで繋いでいた時期で、交通費の捻出もそう簡単ではなかったはずだが、行ってみようと思った。幅広い付き合いをしている人が、わたしに「似合う」ことを考えてくださったのだ。冒険のにおいを嗅いだとも思う。

すると、その出版社編集者の藤田民子さんは、アイヌにも関心を持つ先鋭的な詩人で、夫君の小林東さんは「ジス・イズ」というジャズ喫茶のマスターをしつつ、大野一雄さん、慶人さんの釧路公演プロデュースをされていた。一雄さんご夫妻と同じ飛行機で、しかも隣の席でしばし旅したことなども宝のような思い出だ。

つまり、第一詩集『詩集 霸王別姫』（緑鯨社、一九九七年刊）の方向を指さした人、そのお産婆さんは井上孝雄さんだった。思えば、あるとき釧路まで飛んだことは、一九九八年に『ミテ』を創刊し、右往左往しながらも粘り強く継続していくことの布石にもなっていたと思う。自前の雑誌というあり方に夢中になれたのは、当時、東京に住みながら、詩集の第一歩をそのはるか外側から始めたこととどうも関係するようにいまでは思うのだ。井上さんが見抜いてくださった、どこか浮かれ女風なわたしの遊ぶ感性とともに。

その人としてそこまでは考えなかっただろうが、そうして一六四冊もの『ミテ』を、純粹な読者として、彼は受け取ることになる。

巨き心

井上さんは、ゆっくり語り語る人だった。ことばの重い人、い

や、重いことばの人だった。相手や出来事、事柄を深みで引き受けて、まるでその創作料理のように混ぜ合わせ、しばらく発酵させてから、ようやく口へのぼらせる一言、一言だった。さらに、同じ話をしなかった。大事なことは一回しか言わなかった。彼が口にしたことは、その腹の沼が練って、肥やしたことばだったから、聞いたのは一回きりでも、何かの折に思い出されて残響した。それは評というより真理に近く、だが、宙空からではなく、優しさを纏いながらも地下から湧いたような思念の醗を帯びていた。



タイガー立石の大作がある

爐端三階で、

三木さんを囲んだ宴

(2010.1.20)

かつては土方巽や吉岡実も訪れたという爐端。浅識なわたしにはその歴史を振り返ることは到底できないが、井上さんに励まされた人は、数多あるだろう。そこに飾られた絵画は、画家たちが大成したのちというより、走りのいい時期に描かれたものが多い。絵や陶芸、映画、演劇、文学に、独自の好みをもった目利きであるの言うまでもないが、評論家、企画者、制作者、編集者などの枠組にははまらず、「井上さん」としか名指すことのできないあり方で、「爐端」としか呼びようのない栄養と東京デカダンの砦を差し出し、各方面をゆうゆうと包んで、底支えし続けてこられたと思う。養い親のようなその「受け止める」振る舞いじたいが、芸術とそれに関わる人間に対する巨大な愛情と批評だった。

いや、ご自身がじぶんの重み、枠にはまらないあり方をもち余したこともあったのではないだろうか。二〇一〇年代の後半ごろだったか、店へ行くと、一人で三階で泥酔しているようなことも一度ではなかった。

ゆえにこそ、わたしのようなお調子者を面白がってくれたとも思うが、あるとき、その酔態の井上さんのもとへ挨拶にいくと、「いいから、そこにお座んなさい」と、珍しくいくらか強い口調で椅子の場所を指し示した。そして、わたしの変化を自覚するようにしばらく論じてくださいました。各地の国際詩祭やプログラムから招待があるのはそれからほど

『東北おんば訳 石川啄木のうた』（未來社、二〇一七年）を、ロルカ著『ロマンセーロ・ヒターノ』（長谷川四郎訳）では『ジブシ

ー歌集』と比較した。読みながら、井上さんが三十年近く前に同作をわたしに推薦したことが蘇り、驚愕したのである。 2

なくのことで、映画『東北おんばのうた』や戯曲評論『唐十郎のせりふ』にも目をかけてくださった。駆け出しの頃から三十余年も、拙いしごとを捕球し続け、深い懐から信号を投げ返し、励ましてくださったことへの感謝は、どんなことばを持ってしても、尽きない^三。

いや、井上さんにも、けっこうお調子者な面もあった。わたしの案内で、三木さんのご自宅を訪ねた折は、訪問者を含めても食べ切る量とは到底思えない茶巾寿司を手みやげにぶら下げながら、歌い出さんばかりにはしゃいでいた。また、めったに繰り返しをしない人にも例外はあった。フランスの大女優が来店した折、井上さんの肖像画を描いたそう、店に飾ったその墨絵の前で、「これはね、ジュリエット・ビノシュがここに来て……」。「その話、この前も聞きましたけど」と言っても、子どものような茶目ツいで。

脳梗塞から復帰された二〇二一年晩秋からは、厨房のモーさんを見守りつつ、店の三階を住居にしておられた。表情は何か達観されたようにわたしには見えた。すると、あの含蓄深い木造建築ぜんたいがもはや「井上さん」で、楼主に会いにくい心持ちがした。歌舞伎観劇などで界隈に出かけた折に寄ることが多かったから、芝居の気分のまま急な階段を駆け上がって、「おーい、新井高子でござる」とふざけると、にこやかに迎えてくださった。ちなみに、井上さんは三代目市川猿之助(二代目猿翁)が好きで、若い頃にはその舞台の大道具を手伝ったこともあるという。

たしか、今年(二〇二三年)の春先にうかがったときだった。ちよつと改まった感じで、「僕ね、じぶんでもふしぎなんだけど、八十になったんですよ。今になつてね、何をしようか、考えてるの」と、おっとりおっしゃった。思えば、じぶんに何かあっても店が続くよう、手配りをされようとしていたのかもしれない。

横浜歓楽街の歴史に興味を持ちはじめたわたしが、花街を話題にすると、じぶんが小さかった頃は、有楽町のこの界限に、娼婦が立っているのは珍しいことじゃなかったよ、とふと目を細くされた。こちらの目蓋にも同じ景色が広がったように感じたが、子ども時代のお話などをまとめてうかがうのを忘れていた。例えば、本や舞台や展覧会のことばかりで……。金沢二一世紀美術館でイヴ・クライン展を見てきたのち、報告がてら「美術で中世錬金術がしたい人だった」などと感覚だけのもの言いをして、「なんとなくその勘は

三 むろん、その包容力は、宴を囲んだ友人、知人にも、とくくと注がれていた。二〇二三年の『ミテ』新年会も爐端で行い、井上さんもしばし歓談の輪に加わってくださった。

四 二〇二〇年、井上さんが脳梗塞を患ったとき、入院先を教え、『ミテ』を病室まで届けてくださったのが、三木さんとのご縁もある足立正生さんだった。リハビリ入院中の井上さんの携帯にわたしが電話すると、「足立さんがこの間来てくれてね、僕のことを描いてくれたの」ととても嬉しそうだった。それが、足立さんによる追悼文冒頭の絵である。

外れていないな」と笑ってくださいました。そんなおしゃべりが、なんともすてきな時間だった。

あの長い酷暑がこたえたのだろう。十月にうかがうと、だいぶ体力を落とされていた。それでも、わたしの宴席がある二階までわざわざ降りて来られ、いつもどおりひとしきりおしゃべりをし、つぎの詩集のことまで気にかけてくださった井上さんだった。京都滞在中の十一月二十二日の晩、阿部日奈子さんからのメールで訃報を知る。しばらく呆然とする。ともかくお店に電話すると、遺志を尊重するご子息のもとで、モーさんがその味と切盛りを引き継ぐと聞く。

唯一無二の場所をしつかり残し、井上孝雄さんの肉体は旅立った。

井上さん、有楽町に爐端はあるから、詩を愛する友人たちとまたうかがいます。『ミテ』、持っていきます。目を瞑れば、楼主の声が聞こえてくると思うから。こんどはその縁の下から、同じ低音で、あの巨大な心が。



爐端一階で井上孝雄さんと筆者(2021.12.27)

*井上孝雄さん(一九四三年一月二十六日、東京生まれ)

千代田区有楽町で割烹・洋食等の店を営む父母のもとに誕生。泰明小学校、麹町中学、慶應志木高校を卒業。学生運動の時代に慶應大学文学部中国文学科を中退。鈴木清順や大島渚らと関わりながら映画や演劇の活動をし、放浪をし、家族にとつては行方不明の状態のところ、父親が倒れる。一九七五年ごろから爐端に入る。独自の創作料理とともに、芸術文化の一拠点として店を仕上げる。二〇二三年十一月十七日、肺炎等のため逝去。享年八十歳^五。

五 略歴作成では、妹御の井上ふじ江さんにお世話になった。ふじ江さんによると、ご兄弟の幼少期は割烹・洋食の店の屋号は「富可川」といい、いまの爐端の場所にあったのは支店で、「国定」という屋号の鰻と寿司の店だった。東京オリンピックの頃、新幹線開通のため、その線路工事にあった「富可川」が立ち退きになり、「国定」のみに。その後、一九七二、二年頃に屋号を「爐端」に変え、いまの店を父君が始められたのだという。

告白

笠間 直穂子

支えを失って、なにも手につかず、本を読むこと、音楽を聴くことすら負担に感じて呆然とするうちに、ふと、これなら体に入る、というものが見つかることがある。二〇一一年の地震と津波と原子力発電所事故のとき、本棚を見つめて、なぜか『イーリアス』なら読めることに気づいた。一週間、『イーリアス』だけを読んでいた。

個人的なことで、打撃がつづき、どうしようもなくなった。普段なら好きで聴いているはずの声は、どれも大きすぎたり、きつすぎたり、甘すぎたりして、聴けそうにない。メジロの鳴き声や、やかんの湯の沸く音に耳を預けていると、ひとつの声を思い出した。少しかすれていて、音量をしつかりあげても、どこかくぐもったような、震えるような、親密さのある、不思議な声。ラサの声だ。彼女がいてくれた。生前に出した三枚のアルバムと、レイキャビクでの公演を取めた死後発表のライブ盤を、あらためて、順番に、ゆっくりと聴く。

ラサ・デ・セラは、一九七二年生まれ。ヒッピーだったメキシコ人の父とアメリカ人の母のもと、一家は改造したスクールバスで、北アメリカとメキシコのあいだを彷徨いながら暮らした。学校には行かず、親からものを学び、本や音楽に親しんで育った。十代の終わりがら、モントリオールを拠点に音楽活動をはじめめる。

一枚目のアルバムは、一九九七年発表の『ラ・ジョローナ』。全曲スペイン語で、イヴ・デロジェとの共作と、民謡のアレンジとが半々くらい。基調はラテン歌謡だけれど、既存の形式をなぞるよりも、南米に伝わる子殺しの亡霊「泣き女(ラ・ジョローナ)」の深層に降りていこうとする姿勢を感じる作品だ。

その後、彼女は実の姉妹の所属するフランスのサーカス団に身を寄せ、マルセイユにしばらく

く住みつつ、二枚目のアルバムに着手する。モントリオール帰還後の二〇〇三年に発表した『ザ・リヴィング・ロード』は、全曲オリジナルで、ラサがすべての歌詞を手がけ(一曲のみリアド・マレクとの共作)、作曲は彼女一人によるものが半分、仲間たちと作ったものが半分といった構成。スペイン語、フランス語、英語の曲が入り交じる。フランス語曲はシャンソンの、英語曲はフォークやブルーズの香りを漂わせつつ、すべてが彼女の醸し出す流浪の空気に包みこまれている。

そして二〇〇九年に、彼女は三枚目のアルバム『ラサ』を完成させた。彼女にとつての第一言語である英語ですべての詞を書き、作曲もほぼ自身によるもの。吸収してきた音楽のスタイルが完全に溶け合って、聴いていると、彼女の心の奥へ、どこまでも潜っていく感覚になる。四月に発売され、ツアーがはじまったが、間もなく闘病のため中止となり、翌年の一月一日、彼女は三十七歳で亡くなった。

『ザ・リヴィング・ロード』のなかに、「告白」という、フランス語の短い曲がある。作詞はラサ、作曲はラサ、デロジェ、ディディエ・デュムティエ。「告解」の意をこめた曲名であることは、のちほど引く本人のコメントからもわかるけれど、宗教上の儀礼のみを指すわけではないはずだから、より意味の幅の広い「告白」としておく。

これは、全体を俯瞰したほうがよい曲で、途中での解説も必要ないほど飾り気のないものなので、はじめから終わりまで、一気に訳してみよう。

ラララ……

恐れずに言える

あなたを裏切ったのだと

ただ純粹に面倒で

ただ純粹に憂鬱で

あなたか

悪魔か

快適なほうを

選んだの

でもそんなことは

わたしの罪悪感の

理由ではないのよ
大切なあなた

恐れずに言える

あなたのことが怖いのだと

希望をいただき

名誉を

重んじるあなた

あなたを見ていると

全部ぶち壊したくなる

あなたの素敵な笑顔を

むしり取りたくなる

でもこれすら

わたしの罪悪感の

理由ではないのよ

最悪なことに

わたしが罪深く感じるのは

そうすることに慣れているから

わたしが一定の

確信をもって

できる

唯一のことだから

たしかに自分の

勘違いじゃない

そう思うと

安心する

わたしの罪深さの

問題は

そういうこと

恐れずに言える

わたしはいかさまをしたのだと

自分の思いのなかで

もつとも純粹なものを

売りに出した

放り出してしまいたいのは

あの「真実」という

発想のすべて

導き手として

取っておきたいのは

快楽と罪深さ

ラララ……

難解な単語は、ひとつもない。簡素な文の連なりが畳んでゆく、この感情の襞の厚み。「贖罪」でも「悔恨」でもないけれど、かといって「開き直り」なのかというと、それもなにか違う。むしろ、そういった、総括のにおいのする言葉は、どれも薄っぺらくならざるをえないのかもしれない。ここには、喜びと痛み、対峙と逃走が、互いを打ち消しあうことなく、同時に、燦然と輝いている。

二〇〇九年五月、レイキャビクでのライブで、彼女はこの曲を歌った。歌いはじめる前に、あ、ちよつと待って、と前奏を止める。そして、こんなふうに英語で語り出す。

これは、罪についての歌です。あるとき、なんだか自分は罪をたくさん背負いすぎている気がしたの。たぶん、周りのひとたちも。そこで、この歌を書きました。これは告解の歌で、わたしがいままでにした悪いことのすべてと、それだけじゃなくて、今後するかもしれないことも書いてある。つまり、こう思ったの。なにもかも、前もって、告白してしまえばいいんだと……（観客は笑い、彼女も笑う）。で、この曲には「ラララ」があります。だから、みなさんも「ラララ」のところと一緒に歌えば、告解に参加できるんです。

わつと会場が沸いて、演奏がはじまる。ラサはこのとき、すでに一年以上前から、自分が乳がんに冒されていることを知っていた。知りながら、この先もふくめた一生分の情の重みを、歌とともに解き放ち、七か月後に旅立った。まるでこの世もまた、彼女にとっては、じきに立ち去るべき仮の宿だったかのように。

La confession

Lhasa

Lhasa, *The Living Road*, Les Disques Audiogrammes,

2003.

Id., Live in Reykjavik, Les Disques Audiogrammes,
2017.

テロルと怪物

唐十郎と寺山修司 4

樋口良澄

寺山修司の戯曲『血は立ったまま眠っている』（一九六〇）は、六十年安保闘争の時代を背景に、テロルで変革を夢見る青年「灰男」の物語を主軸として展開する。「灰男」は、彼を慕う「良」、その姉で「灰男」の恋人でもある「夏美」とともに、社会の片隅に生きながら、デモによる変革とは異なる方向を模索していた。しかし、自衛隊や警察の装備品を盗み出すことくらいしか「行動」できない自分に苛立っている時、見知らぬ「男」が現れ、ダイナマイトを提供し、これを自衛隊の武器庫などで爆発させてほしいと依頼する。「灰男」と「夏美」は、他人のお膳立てに乗ってテロルは行わないと拒絶するが、「男」はダイナマイトを預けてしまう。

題名の「血は立ったまま眠っている」は寺山の詩「一本の木にも流れている血がある。そこでは血は立ったまま眠っている」からきている。寺山は、俳句、短歌、詩など異なる言語表現において、自在に自己引用し新たな創作をめざす独自の方法を持っていたが、映像や演劇においても、自作の言葉やイメージをしばしば引用し展開する（一本の樫の木やさしそのなかに血は立ったまま眠れるものを」という歌もある）。

戯曲では、冒頭からこの言葉（「木」を「電柱」に変えている）が登場人物によって語られるが、一番中核をなすのは、「灰男」が初めて「夏美」を抱く時に語る「「らん、この西日のさしているドラム缶だつて、その貨物だつて、なかには血がたぎっている。その柱の中では血はたったまま眠っている。みんな目ざめたら、またたった一つの歌をうたいはじめるしかない。いいかい、また一つの歌を歌いはじめるしかないんだ」（『寺山修司の戯曲』第二巻）だろう。

ここには寺山の感じる世界の生命性とその限界（たった一つの歌をうたいはじめるしかない）が表現されていると言っている。それは、ダイナマイトを提

供されてもその使用を「灰男」がためらう理由、その破壊は限定的なもので、本当は人間を全て入れ替えるくらいの変革が必要だと彼が「夏美」に語る」とと直接関わっている。変革とは、爆破という目に見える結果ではなく、「血は立ったまま眠っている」と皆が感じられるようになることだという「灰男」の思想がここで語られるのだ。

だが、作者・寺山はしたたかである。いったんは爆破決行を拒んだ「灰男」と「夏美」に危険なものを感じた「男」は、密かに「良」にピストルを渡し、「灰男」殺しを依頼する。ダイナマイトとピストルで全能感を手に入れた「良」をテロルの怪物に変化させ、「灰男」に立ち向かわせるのである。

結果、「良」は「灰男」と誤認して「夏美」を射殺してしまう。恋人を失った「灰男」は、ダイナマイトを持って兵器庫に向かう。一方、罪悪感に打ちのめされた「良」は、さらに「男」からダイナマイトが偽物だったことを明かされる。「男」は事件を起こしたいという新聞記者の「欲望」だったのだ。しかし、大きな爆発音がして、「灰男」のテロルを暗示させ、芝居は終わる。「灰男」のテロルが目に見える結果と関わらないものだとしたら、ダイナマイトが偽物だとしても爆発は起るだろう。

この「灰男」のテロルは、新たな政治的行為の可能性を演劇的に表現したものといえようが、その背景には大衆的な政治行動の限界に直面し、追い詰められていく青年の心情があることは疑いない。「灰男」も「良」も、自分たちの方向性が見出せず、自分を責め、次第にテロルの深みにはまってしまったからだ。

一方、唐十郎の新発見シナリオ『幽閉者は口あけたまま沈んでいる』は、安保闘争のデモ風景や、主流派・反主流派の争いをドキュメント風に描いていて、彼の他の作品と全く様相を異にしているが、こうした心情において寺山と共通していることに驚かされる。

主人公「野上壮二」は、安保闘争終焉後の方向を見出せず、無為の時を過している。ともにデモに加わった恋人「辻紀子」が、活動家にブルジョワと

ののしられた時、応答する言葉を持たず、彼女を失ってしまふ。自閉から抜け出られない彼の苛立ちと混迷、それは自己を縛り、他者（女性）に対する自閉的な関係妄想ともいふべき世界を生んでしまふ。

卒業し会社もやめ、実家で母親とくらし、地下プールで泳ぐだけの無為の日々の中で、「紀子」がゴルフアールになつてゐることを知り、追いかけて再会する。しかし、互いに生きている場所の違いを確認するだけで、彼女を汚いプールという自分の世界に誘うことしかできない。

他者に見える自分を生きようと決意した「紀子」には、過去を追う彼はケダモノにしか見えない。シナリオでは「動物がワニのように水を切つて追ってくる。鉄管の震える音にまじつて、動物の笑い。」と「壮二」は完全に怪物化されて書かれる。

安保闘争には、当時ほとんど言つていい学生が反対運動に関わり、唐の所属していた実験劇場は、劇団としてデモに加わつた。ここに深入りする余裕はないが、政治的主張だけでなく、正義感や連帯感、様々な理由から学生たちは運動に連なつたため、たえず議論が生まれ、とりわけ政治が演劇かという問題は大問題だつた。

またこのシナリオにも描かれているように、安保闘争を主導するブント（共産主義者同盟）が共産党に対抗して結成されたのは唐が入学した一九五八年で、六十一年の安保闘争時には、全学連はブントが主導する主流派と共産党系の反主流派に分かれていた。そうした混迷の中、新安保条約自然承認による敗北後、多くの学生は「次」を見出すことができなくなつてゐた。『幽閉者……』はそうした挫折が背景にあることは確かだ。

「紀子」はその生き方を貫けず、「壮二」との再会から混迷し、ボイラー室に飛び込み大火傷をおう。「壮二」は自滅する彼女を救うことも滅ぼすこともできないで、またしても彼女を失うのだ。彼は、いわば静止した場所から世界を見ている。その中でもがくが、世界は動き出さない。静止した空間に幽閉されているのだ。言葉を変えれば、内部に静止した空間をかかえこみ、たえずそこに引き込まれ、動けなく

なつてゐる。おそらくは現実の一九六一年の唐十郎／大鶴義英が秘にかかえていた問題も、これだつたのではないだろうか。

そこから脱出する方法として、当時の唐が行き着いたのは、このシナリオに描かれているような「怪物になること」だつたのではないだろうか。六十年に執筆した彼の卒業論文であるサルトル論の題名が「怪物への挑戦」だつたことを思い起こすと、「怪物」は当時の唐のキーワードだつたようだ。

そして、それは寺山のテロルと共通する、安保闘争を背景にした、当時の追いつめられた青年の心情だつたに違いない。既成の政治や表現ではおさまらないもので、二人はそれに向き合つてゐた。ただ、寺山の「テロル」も唐の「怪物」も、現実の破碎を志向したかもしれないが、本源的には表現においてテロルを起こすこと、怪物になることだつたと言つていいだろう。それは後の彼らによつて、十二分に展開される。

『血はたつた……』の「文學界」掲載は六十年七月、唐が原稿を布勢博一氏に持ち込んだのが六一年だから、唐は寺山の戯曲を読んだ後、この作品を書いたことになる。「張り倒されたような、非常に鮮烈な印象を受け」たと語る唐にとつて、『一匹』で仕事をともにした寺山の戯曲は、同世代の表現の可能性を確信させるとともに、自らが「怪物」になることを解放するものだつたろう。ここに作家・唐十郎が真に誕生したのである。

寺山と唐は、直接的な影響・対立関係はもちろんだが、同時代の様々な関係性の網の中で目に見えない、言葉にならない交錯があつたと私は考へてゐる。これを私は「照応」と呼ぶ。二人の作品における照応が『幽閉者』は口あけたまま沈んでゐる』から始まつたことは、長い間封印されてゐたのだ。それは寺山の死後、唐の戯曲『ジャガーの眼』まで続いていく。

岩淵綾子さんの旅

新井高子

岩淵綾子さん（一九三二昭和七年〜）

綾子さんの心にはふしぎな広さがあつた。

出会ったのは、二〇一六年二月、永沢仮設住宅集会所での催しでだった。短歌仲間の金野孝子さんらとともに、その会場に外から足を運んでくださったのだが、閉会後、昼ご飯をいっしょにすることになる、「ならば、うちに来てください。作りおいたものがありますし」。よそ者のわたしが、大船渡のおんばのお宅にお邪魔するのは初めてのことだった。そして、こうもおっしゃった。「うちだったって、じぶんのものは何もないから、恥ずかしくもないんですよ」。

長年住んだご自宅を、綾子さんは津波で失っていた。そして、三年余の仮設住宅での暮らしを経て、復興住宅（仮設居住者の次なる住居として造られた公営住宅）に引っ越したばかりだった。

そこは七階建の新築アパートの三階。柔らかな物腰の綾子さんは、白い壁の2DKで一人暮らしをされていた。部屋のあちこちには、かわいらしい彩りの造花やマスコットが飾られていた。仮設時代、その集会所でボランティアたちのリードで作った品々であろうことが、わたしには想像できた。そこでは、コンサートのような催しのほか、リボンフラワーなどの講座物もしばしば開かれていたから。啄木短歌の土地ことば訳の企画も、そのなかに紛れ込ませていただいていた。

冷蔵庫からタッパーをとり出し、手際良く準備をしてくださりながら、綾子さんは「お茶碗もお皿も、ぜんぶ救援物資でいただいたものなんです」と。たしかに、そこはふしぎに「無時間」だった。新築の部屋だからというのともちよつと違う。そのとき、彼女は八〇歳を越えていたが、そういう老女が人生のなかでしぜんに使ひ込んだもの、いつのまにかでき上がった好みを押し出す物品が、すつきりなかったのだ。「恥ずかしくない」とおっしゃったのは、じぶんを映すものはないという感覚を含んだのだろう。

ともあれ、碗に盛られた炊き込みご飯のおいしかったこと。じつに優しい味付けだった。対話の収録日（二〇一八年一月）もそうだったが、出会って以降、わたしはお宅にうかがうたびに、手作りの食事を味わう。「一人だから、いっしょに食べる人があると嬉しいんですよ」ということばに甘えて。

津波がさらっていくことのできない料理の腕前ごと、ご馳走になつていたのだが、私が出会ったおんばのなかで、暮らしの品々に対する愛着が、本来は彼女ほど濃かった人はいないのだからとも思う。振り返れば、土地ことば訳の催しで会うたび、「今日のスカーフ、お似合いですよ」とか、身なりや持ち物の良いところを必ず見つけてくださった。織物工場生まれのわたしがその褒め言葉に微笑んだのは言うまでもないが、対話をして、その理由がやっとわかった。綾子さんは、五〇年以上も技もふるった洋裁師だったのだ。

老女の旅

わたしが子どもの頃の母親世代は、きものだけでなく洋装でも、礼服やおしゃれ服は誂え物を仕立てる人が珍しくなかった。うちの母にも懇意な洋裁師さんがいて、そこに付いていくと、美しい色柄の服地が広がり、机上の雑誌には、近所では見かけたことのない美人がスカートの裾を翻す写真などがあつたものだ。

差し上げた実家の工場製の織物カレンダーを、その年が過ぎると、綾子さんはポシエットに作り替え、楽しんで使つてくださったが、装いを愛したその専門家だった。いまは何も思わなくなつたけれども、じぶんでデザインして作つた服が津波で失われたことが残念で、悔やんでいた時期があつたとも語る。家や車だけでなく、そんな手仕事の数々をも波は運んでしまった。

だが、対談を通して殊に興味深いのは、被災時にすでに七九歳だった老女の綾子さんが、それがきっかけで長い旅をすること。大地震を盛岡の病院で体験した彼女は、入院という旅先から、千葉の息子宅、そこでの借家暮らしと、転々と流浪する。そして家族関係も含め、いかに生きるべきか、苦悩する。（紙面の都合で本稿では掲載できないが）その上で、どうやら針仕事の縁で結ばれているだろう人と特別な出会いを果たし、達観する。

まるで回遊魚のように、それから大船渡市に戻ってくる道行きは、じつに心の旅路でもあつた。震災から二年余がたつた今、老女が果敢に挑んだ「冒険」と評してもいいのではないかと思う。人柄はたいへん穏やかながら、綾子さんにはふしぎな心の広さ、他者をさりげなく受け入れる感覚が備わっていた。それは、洋裁の技能で付き合いを広げてきたことと同時に、震災後の旅を通して、一つの解脱の階梯を踏んだことの証気がする。

対話の終盤では、ミシンを失った被災後に、手縫いで仕上げたというコートを拝見する。ラインが上品で、ポケット部分に入れたステッチもおしゃれ。腕の良い洋裁師であつたことがよくわかる。環境が変わつても、手の技は息づき、次の作品が生まれていくのが素晴らしい。九〇歳を越えた今でも、衰えた目を擦りつつ、針を手にして拵え物をするのが好きだという。

アパートからお暇する時は、綾子さんはいつも部屋から出て、外の廊下に立ち、手を振つてくれる。エレベーターで階下に降り、路上に出ても、まだ手を振つてくれている。互いの姿が小さく小さくなくても、振り返れば……。文字起こしに当たって、さらにお話をうかがうと、苦渋のお声で、ご家族の海難事故も経験したと教えてくださった。そして、「海と因縁がある」とおっしゃる。心のなかに神仏の領域を抱えていらつしやる。大自然の波動は、そんな揺蕩いをも彼女の胸に授けたのだろう。

おんばに聞く

父母のこと

岩淵（「唇」はんにつみれ汁を作つて）形は悪いけど。

新井 お手作りのつみれなんて、めつたに食べられません。いただきます。あ、おいしいなあ。そして、体に優しいです。

岩淵 いっぱいありますから、おかわりしてください。どうぞ、これ、タナゴです。

新井 こんなに美味しいものを食べてたら、長生きできそうです（笑）。

(食事のあとで)

新井 いまおいくつですか。

岩瀨 八六歳です。

新井 ということは、昭和七年。生まれたのは大船渡でよかったですか。

岩瀨 大船渡で。ここは上平(かみひら)ですけど、生まれたのは下平(しもひら)。

新井 お父さんは船主さんだったんですよね？

岩瀨 はい、そうです。

新井 おうちには、船は何艘くらいあったんですか。

岩瀨 三艘ぐらいいかなあ。長い間にいろいろ替えたり。

新井 何をする船でしたか。

岩瀨 いろいろですけど、最初は、「突きん棒船」といって……。

新井 え、それは何でしょう？

岩瀨 この間もね、歌(短歌)を詠んだら「突きん棒船って、どんな船？」って聞かれて。子ども心に覚えてるのは、船の舳先にやぐらが付いてて、カジキマグロを銚で突いて。

新井 お、大胆ですね。だから「突きん棒」なんですね。

岩瀨 威勢のいい父親でした。

新井 お父さんは自分で銚を？

岩瀨 たぶん、そういうのが得意な人が役割分担して。魚を見つける人と銚で突く人とあったみたいです。

父は一九歳で中古船を買って、独立独歩の人だったと母から聞きました。死ぬまで世のため人のためばかり言って、子孫に美田を残さずっていう主義の人でした。だから、財産は何も……。いろいろあって、苦労しました。

新井 そうでしたか……。

お母さんも大船渡の方ですか。

岩瀨 いえ、宮城県で。

新井 だから、綾子さんは小さい時に宮城(本吉郡大谷村)に引っ越しをされるんですね。

岩瀨 そもそも何で引っ越したかという、戦争で(父親が)兵隊に取られそうだというんで、母親の実家のほうに引っ越していったんです。

新井 お父さんが出征しても暮らしやすいように……。大船渡にはいくつまでいらしたんですか。

岩瀨 六歳。小学校に入る直前に引っ越したんです(中略)。

結婚生活

岩瀨 こっち(大船渡)にお墓があったもんで、昭和三年にお墓守によこされました。

一 大船渡市大船渡町字上平。上平、下平は字。

二 船主の父・伊東直助(明治四〇(一九〇七)年生まれ)、母・はつみ(明治三八(一九〇五)年生まれ)の長女として、昭和七年(一九三三年)八月誕生。六人兄弟の四番目。

三 昭和三五(一九六〇)年七月、父親の持ち船「第三幸福丸」が青森からバルブ材を運んでいたところ、兄(父にとっては長男)や親類を含む乗組員が遭難事故に遭い、亡くなった。ちょうどラジオを聞いているとき、その深刻なニュースが耳に入り、綾子さんの胸は張り裂けたという。遺骨なども見つかったという。

四 当時、父親は宮城県気仙沼市魚町で漁業関係の事務所を運営し、母

新井 墓があるから綾子は大船渡にいなさい、と。

岩瀨 そのとき二三歳だったかな。六人兄弟の長女だから仕方ないですね。(大船渡には父の船に乗ってた人が何人かいて、全然知らないところに来たって感じではなかったですけどね。

新井 そのうちご主人と知り合ったわけですか。

岩瀨 それがね、親とうしが知ってたもんで、昔は親が勝手にっていう感じで(笑)。

新井 あ、では、墓守も兼ねつつ、ご結婚のために大船渡に……。

岩瀨 そうです、そうです。(中略)会いもしないで話が決まった(笑)。変です、本当にもう。

新井 でも、それからずっと……。

岩瀨 そういう時代でした。

新井 結婚されてからは、お母さん業ですか、お勤めもされたんですか。

岩瀨 私は、娘時代から洋裁をやってたもんで、結婚してからも、一生懸命それをやってました。子育てしながら。

新井 ワンピースを作ったり、スカートを作ったり。

岩瀨 そうです、そうです。ワンピース、スーツ、コート、ぜんぶ。本当に生活の助けとなりました。

新井 なるほど。綾子さんも稼いで、家計を支えていらしたんですね。

岩瀨 うちのお父さんは(体が)弱かったもんで(中略)。

洋裁とハイカラ弁

新井 綾子さんにはほとんど訛りがないように感じるんですが、さっき伺ったように、小さい時に宮城へ引っ越されたから、その影響でしょうか。

岩瀨 気仙弁だけでなく、その地方地方に方言ってあって……。その土地の歴史だと思っんです。

でも、私は娘時代に洋裁を習って。(大谷村に)大谷鉱山であつて、元は金山だったんだけど、そこに都会から役職にある人の奥さんたちが来てて、その奥さんたちの服をよく縫ったもんで……。そういう標準語をしゃべる人に会うと、やっぱり自然に(自分も)しゃべるし。だから仕事に影響してんじゃないかなと思います。

新井 なるほど。服作りを通じて、金山、鉱山の幹部の奥さんたちとお付き合いがあったんですね。

岩瀨 自然に言葉の気をつけるようになって。

新井 岩瀨さんにとっては、ハイカラ弁(標準語)のほうが自然な言葉なんですね。

と子どもは別暮らしをして宮城県本吉郡大谷村に居住。母は大谷鉱山入口で雑貨店を営んでいた。

五 夫は、岩瀨信雄大正一四(一九二五)年生まれ。家業は魚市場専用の大きな竹細工の籠製造(地元ではパンジョと呼ばれる)で、その職人だった。次男にも関わらず、家業をひたむきに助けた。平成四(一九九二)年没。

六 東北地方は日本の主要な金の産地で、大谷金山も古くから知られた。平泉中尊寺の金色堂もこれらの金によって支えられた。一九七六年、閉山。現在、その跡地に気仙沼市大谷鉱山歴史資料館がある。

岩瀨 よくね、「奥さん、どこの生まれ？」って、だれかに聞かれたことがあった。意識して特別に標準語を使おうとか思ってるわけじゃないんだけど。

新井 地元にいながら、近代化のなかで都会の人や文化と関係が濃かった岩瀨さんのような方が、ハイカラ弁が流暢になるのも、じつはやっぱり土地の歴史ですね。

洋裁はどうやって学ばれたんですか。

岩瀨 女学校には四年通ったんですけども、戦争に負けて学制が変わったもんで、高校を一年で中退することになって。それから気仙沼高等服装学校の本科、研究科に通いました。父親が「手にある職は誰も取らない」って、行かせてくれて。先生たちは、東京の「美大」やら「文化」やらを卒業した方が来てました。

新井 あらまあ、当時の最先端ではありませんか。

岩瀨 研究科には、岸恵子に似たすてきな先生がいましたよ。卒業してからは気仙沼のボン洋装店に一年勤めました。

新井 地域のおしゃれの中心ですね。そうしてご結婚後は、大船渡のご自宅で洋裁のしごとをされたわけですね。

岩瀨 店をもっていたわけではなく、内職ですけど。ロコミでお客さんが広がって、大船渡では小学校の先生や会社員さんなど、お馴染みの方の服を縫ってました。色違いで同じデザインのスーツやコートを注文するお客さんもありました。

新井 どんな雑誌を置かれてましたか。

岩瀨 「装苑」とか「ミセス」とか。

新井 やっぱり。わたしが子どもの頃、母にも懇意な洋裁師さんがいまして、そういう雑誌を見ながら、いろいろ相談してたんですよ。仮縫いのときなどよく付いていって、洋裁用のトルソーや立派なミシン、マチ針が刺さった針山など、わくわくしながら見てました。

岩瀨 「岩瀨さんの仕立てた服は、何度クリーニングに出しても型が崩れない」と言われました。わたしは何事もノロマだから。

新井 しっかりした仕立ての、腕のいい洋裁師さんだったんですね。

岩瀨 どんなに家族のためになったか。息子たち二人を大学まで出せました。

新井 お仕事はどのくらい続けていらしたんですか。

岩瀨 七〇歳近くまでしました。五〇年以上、洋裁をやっていました。もともと手仕事が好きでしたから。学ばせてくれた父に感謝しています。

三・一一の体験

新井 この間の津波のときは、岩瀨さん、大変だったんですね。

七宮城県立気仙沼高等女学校。

ハ文化服装学院のこと。ほかに「ドレメ」系の学校もあった。洋裁を学びたい人は多く、当時の気仙沼には二つの大きな学校があった。九二〇一年三月十一日の東日本大震災では、『大船渡市 東日本大震災記録誌』によると、綾子さんの自宅があった大船渡市中心部の大船渡町には、約一〇メートルの津波が襲来。同書によると、二〇一五(平成

岩瀨 それはね、避難所には入らなかったけれど、人がしなかったいろんな思いはしたなって、自分で思ってます。

新井 そのとき、どうされてたんですか。

岩瀨 津波の四〜五日前に、緑内障があつて盛岡(の病院)に入院しました。その上に、震災の二日前に白内障の手術をしたばかりでした。

新井 すると、地震は盛岡の病院で。

岩瀨 そうです。

新井 そのとき、大船渡のご自宅は下平ですか。

岩瀨 浜町にありました。生まれたところは下平だけど、嫁いだところは浜町なんです。大船渡小学校の下(の辺り)でね、海のすぐそばです。

津波のときは、(自分の)病室の隣は男の方の部屋なんだけど、テレビがあつて。電気でなくバッテリーですか、(バッテリーで見られる)ちっちゃいテレビがあつて。ずっと見せてもらってました。初めて、(その方)の部屋に入つてね。

新井 目の手術をしたばかりで……。

岩瀨 そう、そう。けども、うちの近所はしょっちゅう(テレビに映つて、小学校下の歩道橋とか、うちのそばのレスランとかね。流されても当然のところ)にいたから、それはそれで仕方ないんだけど。

新井 テレビで自宅のことを……。

岩瀨 病院の先生にもね、「何? 家が流されたって!」って言われてね。でも、何ていうか、チリ地震津波でも長押(なげし)の上まで水が入ったからね。津波が来たら流されるだろうなっていうことは、普段でも頭にあったからね。

新井 では、これだけは持つて逃げたいというものも……。

岩瀨 一週間の入院の予定だったから、帰ってきたら捨ててもいいようなのばかり着て出たんですの。

新井 きれいな洋服はもちろん……。

岩瀨 大事なものは全部置いてきました。現金以外はね、通帳から何から全部置いてきました。

新井 そして、家ごと流されてしまったんですか。

岩瀨 そうです。

新井 そのときは一人暮らしでいらしたんですか。

岩瀨 (夫が亡くなって二〇)今年で二十七年ですけどね。お盆とか正月とかには、息子たちが帰ってくるけど、基本的には一人でした。

新井 すると、代わりに誰かがということもなく……。

岩瀨 そうそう。

新井 入院中ゆえ、むしろ全財産が消えてしまったんですね。

岩瀨 そう。そして、次男のほうの息子は、そのとき盛岡の振興局にいたったもんで、夕方(病院)に来てね、地震の二〇

二七年三月現在、大船渡市全体の死者は三五四人、行方不明者は七九人。そのうち大船渡町は死者一三七人、行方不明者一九人。大船渡町の全壊の住宅は一、一二戸、大規模半壊は一三六戸、半壊は一七五戸、一部損壊は三七五戸。商業施設等も含めた都市部大半が失われる大被害であった。

二〇一九(一九九)年没。

分前に辞令が出て名古屋転勤だ、って。

新井 息子さんのほうは名古屋に行くことに……。

岩淵 そう。四月一日からね。(非常事態だから)県のほうでも、辞令を出しても、戻したりもしたんだそうだけど、ところが息子が行くところは、東北三県で交替に勤務する場所への転勤で、だめにするのでできなくて。三月末に、(眼病のため)真つ黒いサングラスをかけて、高速バスで東京の西新宿まで息子と行きました。本当にドラマみたいでした。

新井 しばらく盛岡にいられるということもなく……。

岩淵 そういう発想もあつたんだけど。

新井 転勤で、それも無理で。

岩淵 うちのお父さんは肺癌で亡くなったんだけど、そのとき放射線をかけるために、この息子のところに百日もお世話になったからね。こっちは次男だしね。「今度はお兄さんのほうに行つて」って……。それはそうだと思うの。だから、向こう(長男が住む方)に行つて。行つても最初から同居する気持ちはなかったし、お互いにね。ところが……。

長男(の住まい)は千葉なんだけど、勤務地が東京だったんで、西新宿で長男と待ち合わせして。

新井 入院先から。

岩淵 そうそう。急遽ね二。

新井 東京まで行つて。

岩淵 西新宿でお夕飯を食べて、(次男とは)別れたのね。そして、次の日から住むところを探したんだけど、あのとき、私はもう八〇歳近くだったし、国民年金ではどこを探しても貸すところ、ないですよ。耳はこのとおり遠いし目も悪いから、アパートでは危ないから少々高くてもマンションがいいよって、息子たちに言われて探したんだけど。実際にはね、高齢だし、国民年金だし、貸すところなかったです。本当に辛い思いをしました。

それで、息子がうちを建てたとき世話になった不動産事務所があつて、「息子さんの名前にしたらう」「ここはどうですか」って言われたの。私が「ここがいい」って言ったんじゃないくてね。勝田台駅のすぐそばで、すごく便利なところにね、四月一〇日に契約して。

新井 震災から一ヶ月後ですね。

岩淵 そうそう。でも、いろんな家財道具を買つて、入るまでにやつぱり二週間ぐらいかかりました。

新井 それまではご長男さんのおうちに。

岩淵 そう、一緒にいました。

被災した自宅跡へ

新井 大船渡のご自宅のほうは……。

岩淵 地震のあとの三月の末、眼帯をして行きました。それこそ息子にだめって言われたけど、お願いだからつて一緒に……。そうしたら見る影もなく、立ってる人も誰もいなかったし、(すぐ近所の)小学校(の敷地)には車やら瓦礫がいつばいあつて、いろんな思いがありました。

新井 東京に行く前に、ご次男さんと一緒に見に来られたんですね。

岩淵 そう。行く前にね。なぜ来たかっていうと、お位牌が欲しかった……。法名軸なんだけど、(いま壁にかかっている)これは、津波後にもらつたんですね。

新井 見つかったんですね、お位牌は。

岩淵 見つからない。もちろん、見つかるわけじゃないもんね。木じゃない、こういう法名軸(布製掛軸)だからね。

新井 来てみたら、家は流されてて、どこが家だったのか……。

岩淵 それはわかる。(そのとき息子が撮った自宅付近の被災写真を見せながら)これが私です(笑)。

新井 え、どこにいらつしゃるんですか。

岩淵 (瓦礫で埋まった二帯から、小さな人影を指差して)ここ。(さらに瓦礫を指差しながら)ここは私道で、ここがうちです。これはうちの境に植えてあつたアオキです。

新井 うつむいてリュックをしょつてるのが、綾子さんですか。

岩淵 そう。それ(リュック)、津波後に息子に買ってもらつて。それこそ寒い日、そうして行きました。だれも見てる人もないかつたし、途中で杖になるものを拾つて、杖をついて。

(べつの写真で自分を見つけて)あ、ここにも映つてた。(瓦礫の中からある箇所を指差して)ここが私のうちだったんです。ここに踏切があつて、ここがJRの鉄道でね。このマンションはいまでもあります。

新井 何と言つたらいいでしょう、入院されていたからこそ……。

岩淵 助かったんですね。

新井 そして助かったけど、帰つてきてみたら、いきなりこうだったんですね。

岩淵 そうです。(そのとき近所の)みんなは学校とか公民館に避難(生活を)してて、私が大船渡(のうち)に帰りたいたつて、帰れる状態じゃないんですね。この写真を見て、あとから考えたら、(指差して)これが私の和筆筒でね、三重ねの下(部分)です。そのときは気が付かなかつたんですねですけど。

新井 三段重ねの。

岩淵 そう。

新井 下のところの引き出しだけが……。

岩淵 そうそう。結局、(この筆筒は)津波二回目です。チリ地震とね。本当にもう見るも無残で。

